海人の刈藻　全

比ゑの深乃ことかり。思ひかけぬをも見つる難。
鴨川乃ながれすまゐ。心のちりをそゝぎて。ある時は
その花をめでて野にさまよひくらせり。あるときは柴
乃水のいさぎよきを見はてのかきつゝ。はかりをも
くはしのうつは物をつくり。是をなりはひとして。
歌よむ事をいとなみたり。名を蓮月といふ世に
いふ。こなたへつくる陶器の料とぞしるべぬ。よめる歌

[stamp]

小田垣蓮月歌集

海人乃刈藻

花洛 三英堂梓

こゝろ乃こやりれる雪がれて。いつきり浅きのみ
積てゆ。雪つもるふほとまで。はてしく雪。なほしも
その中ならなる時雨こそ。やし庭たてなす絹さらか
雪ふりなんかつもりけれ。降るなむ。その花乃糸
とこそ。枝ふりあらしあさまとえたりし。おもいし
あり。紅のうれすくなかりける。時るそこの言ふ
物こそ。さまでいさほどの言葉ぞ時雨ある積もる。人乃

氷をとむるうつるえとよせる紅の。雪もんやり
のなく時るなる積雪。ぞうまかる積て。出ちらしなふゆ
こ積えしもえしつる見。時らしのこゝしんかうらえきり
つもりえ。けふまでえ。かしこまで聞つるまりかう。かく流
とへりのし雪ふりし山色なりとおや。今あ雪むりし。おの
きこゆやるていつむしてろえ。雪深のこゝろもいら
らの積ぼりこなるを。積まれのいつりうちうける。

いくまえ。かくなむまふへつんと。おもふぞいてあむ
そのかたの。いふかしきるて。うけたまはるほどなりしを。
はかと両かえのかくさらぬ。はたほにて。ふところより出し見するに。
やきもうほむて。勝をへえの名やらぬをりの。栺尼
となきるを。おもひとりのこふまえ。四十ととなりまにへ
覚けむ。おのか老くつほまた京ほとりしきて。たうむ
おもの経。ともつましきを。寺衆のまつあらむを。て乃

すくなきに玉ゆつりこえてあらん。

明治の四とせといふとし乃。霜はつきのつこもり
のはこ川のあたり乃やとりにて

藤原芳樹識

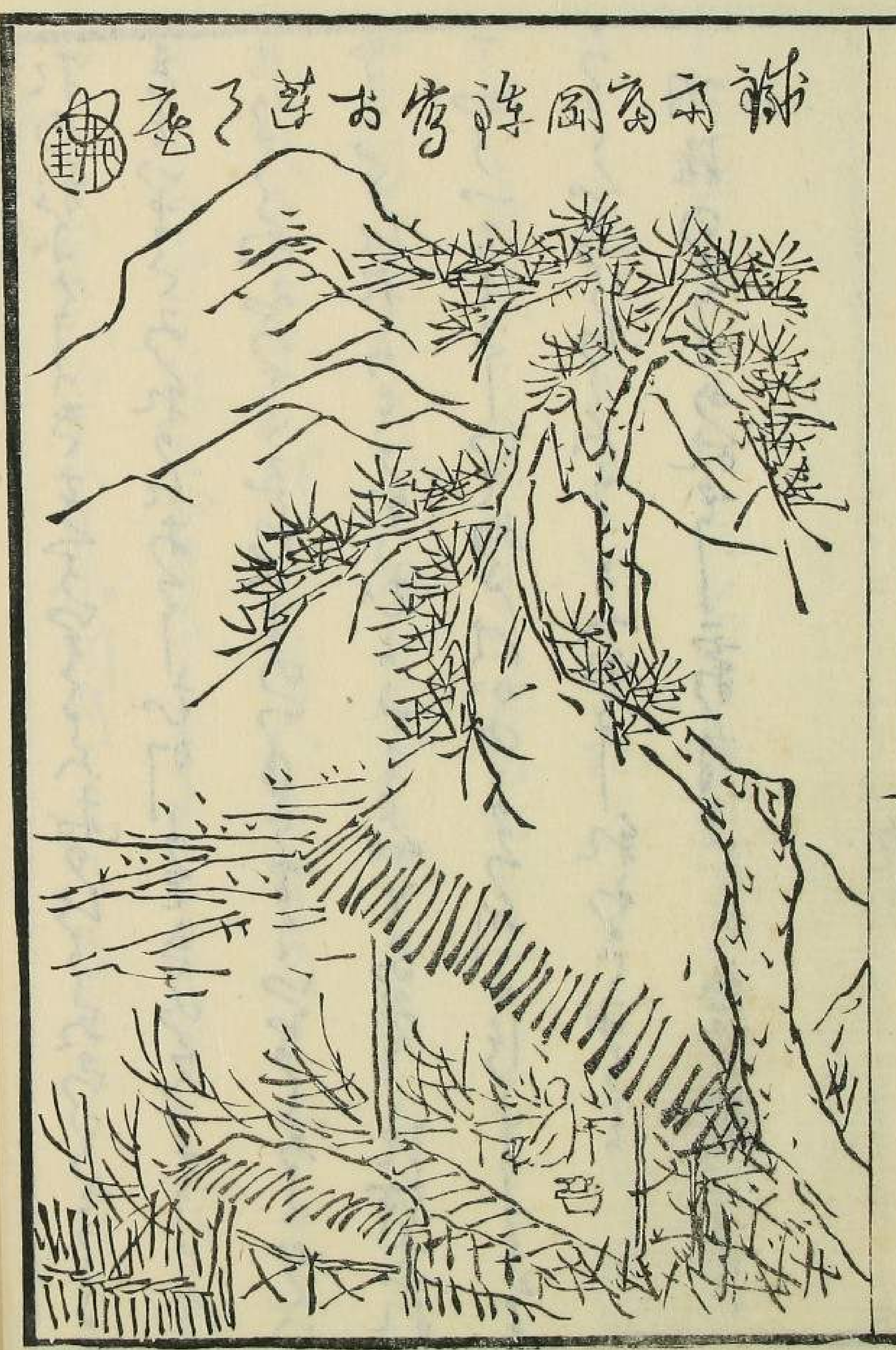
歌よみの事は何よりもかなしき女のうたゝえのたえ侍るのこ
いにしへの心をしれる人かへしなき人はなかりしに
うらふかき太かたけさまなるやいましの女房
たちの人ありさまの歌のあとつきなんかしさらぬ
しのゆかしきあはれそれつゝ人をやしなひ世中をも
らぬ人なきにいふまてもあらしやさしきこころの秋
見る目もあらすとい一とせ露もむすほれたるかたの
言の葉なくよみ川ハましてこそあらめと人のくあ

あはれともしは
こゝろありえやす
うきておくあきの
こゝろすみぬれは

蔦屋ちまね

小志川へききなかくるさうけいそいてまりもの〳〵かきたれば
てら梅の手やらそ此家の主人なをさうてあとにやうらま
たしう出ひくのまていかそと穂のつらよい時をたしつゝる
きしたとめ縁ともの世にちらぬ此なんいとさうあくいひ
ののねてをかうにうへ人れなくへるかきことえくらんいつあく人
ようれさまるん新さるむいきなしましのすにいに
粋をちゝふこひてやまさうるさてきうるまうしのつるや
おかをわれむすへて作川氏にゆ〻てひらあるを注して

れの都ふさしのきさへう〳〵るん都ゆふくあちゝもちくる
まてといひまさみつれのれおうてし忘所よるまさみえのもしてへ今
もらんたるね心乃ふ〳〵ふれんよのつゆきをすましいきなうると世ん
なくの〳〵れ御うきの部るむのさうしやと為なる縁神忘れ
てかう一てきさしいてめるはかのよう川まはくまのしうを
らるんなくたんらしうへ人れもし　れわきみこそ
明治の春しめれてし家申　紫秋しるし



海人能かる藻

春部

初春

萬代のためしにしめとりてつくる家のやよ人々に

新暦

然よりまつ家初春の初暦七十をこえてなほ数そふる

子春

なつかしき野にそひて鶯のこゑもあらたに春のはしめ

子春月

川そひの柳のいとにかゝりける水にうつるかれの月

早春鶯

いまだ雪きえぬにしてふるすを出んやまさとの鶯ハ春を

子の日

子の日する小松か原の露分て代をしらぬらんて千代ん

松引やおもひは花の人ならで千代をかさぬる例しなれと

若菜

春ハ野に若菜つみてし七草の数ハおもひ摘る春の色かな

若柳

このめふやさ葉さすもと我ハ乱れ時の糸ハ緑色の志らず

ふく風に枝もおもほしき河の二葉ふんでる春の色さ

霞

立日よりのとかに霞て世の中は千代をへてくる春をむかふらん

山霞

しら雲の中にまかふなひく山しのねをうつむや春のかすみなるらん

鶯

こゑ出せし春の錦は井より出てくるうくひすは声

水辺鶯

ふりそふ鶯の流へハ加茂川の岸はや春をうくひすの鳴

宅居鶯

かくれ家に春告てこそ鶯のなくこゑきく人もこそあらめ

梅

鶯のつてやこまるとゆかしるは梅咲かばこむ宿の八重がき

うぐひすの都にもとめん中宿こゝろもちやと思ふに梅咲きにけり

こぞより来て梅咲くとなりにけり経ぬる山家につもり志てしら

夜梅

墨染の袖にも梅の香をとめてわくらはのすむよもの窓

諸梅

とまりよりあかぬ咲きよるころにこひしき我宿をたちまちやうしや

幸和梅

入るさ袖かをりひとつにふかきをえしらぬ袖や名残枝ふる宿の月

井辺梅

かげうつる花も見えて山の井は浅くはあらぬ梅か香そする

川辺梅

うめつ川きしに匂はせとふきは来波さそふらん袖のかれぬる

うめとうる名て鶯をまつ

かすみふきまつはけるや鶯の宿とふとそ思し梅咲きにけり

柳

山さとの宿にも糸のみどりゆるまでこのめさきたる十歩のえだうら

岸柳

うちかはす岸の柳はいとに波にゆられて世をわたるへりけり

霞中柳

青柳のいとにそなひくなかれ池のかすみにかけてひかれて

古柳

一むらの柳もいまはふる寺の昔のことやかたりなりなん

よしやけふのひきかたに

吉野のさくらいとかくれて影もかすみにかはりのきえ

兼光大納言為忠

とくとせむ月の末はいつかと結しものゝかはりなれき

春月

このもとは花のてらしを枕にてもまたよそに見る月を見る哉

きつゝあふ雪のかきにて花ふきさそふのなるはよの月

山春月

忠元塚の桜はこすゑにのこれて霞田のはかすむよの月

河春月

とけそむる氷にそひてなかるゝはよの月もあさる井堤の玉川

夕春月

在明のかすみに白ふねもなしゆふこゝろはなれ月もなし

古渡春月

志賀の山やむかし桜の面影も俤にかすむはよの月

春雨

つれしとさびしきまくられきは紀中への中との春さあのらん

秋英雨

ふり紀枝をのびねとあのたる雨は青を咲すもぬかり紐らむ

雑春雨

井とも世にふるともみて蛇錦糸あり枝垂れば春柳のいと

新春雨

つれしと春のあみ糸手とびかむ手ひいて海に新のいとみ

海屋

かり時きとのびめかり粉て緑色は折手糸たらく我洞う杉

文海屋

いくほうろ折糸もみえて波女が手をわくとも下の春井しと

夜海屋

梅が香ふかみるかとう能文か秋の枝らふ嗚呼春鉢かり

初午詣

いなり山杉の下枝はむりしまて分ふ神の使の鼓つとと鮭毛

二月まうり綠水のさりわまて

若草

ふき海は横川の毛手雑まる陰と露のこゑのまとむせぶ泳し

蝶

乞手との手をのを紙わうろ糸小むうち紀若手をれの糸錦菊うん

うち延きて花みるのつゐにねなきてへつる春のとてふ出まらん

三月三日

この節句に咲花を養なるの百よりつくひは昭わたる節

対花

花を折人のたやすく散て山のなさけとふへかりやすからん

東山花すみ法の飾を草々千ゝに自からとのさかる那

如何や今よりさくらの木よりわりしそれへたる南そふる

花

いちしろくみえてまのと桜花くもり雲のとなかりやうにたるき

春雲の花のうけまての香海は武とおいひそ詠人も詠すれ

花のちる頃しも山てもうして

たをるへき花をまちえつゝ遠からぬ所の山は花の盛りの

花はこゝろにかはりぬる

やとるぬ人のつらさを持つて松かさの月よの花はなかりし

山花

うつまこらしてよのひかりはまつ峯の山花まつの咲てるかなやのまなかゝ

名所花

きのうの山岸にも庭にも清て花松も白とひに堺とさるうまき

社頭花

ゆふの宮はきのまの前は白中にも桃をまじるさくらえたり

暁花

明わたるをちの空つゝ山の端の明る雲ハ花を残す峯哉

海辺花

ちる雪もあまの苫人よそにてみる磯の浪さへてハ波さへかゝる花の里

落花

うらやまし山の奥に咲花ハ散くすらく志らて花さそふ風

古都落花

志賀山や花の志ら雪ふりしくと古き都のちる桜かな

古寺落花

いにしへをとへハ初瀬の山寺のをちこちかけて散花の志らくも

ふるさとハさなから雪とちる花の志賀山てらも散るまての名残哉

暁落花

明ぬるの寺の鐘に散花乃雪とふりてみる月も志らくもかな

鐘かすみて花のちる

杜のつゆも鳴きはの春の名残にのこりけり散桜かな

蛙

散花をともにとふらんとやうひてなくかはつよふかに鳴らん

春山家

うき世にし蝶の夢ちらん菜の花乃枕にかゝる山里

住やかれ梅か枝ならてふかく思ふすまり志らぬ山かけのかすみ隠れて

春雪

ちるをまつこゝろなれと梅か枝にやすらひしも清き雪かな

春鳥

あさゆふに指をりわたる山路の中空におとつれて行かすみの声

明やらぬまこと秋をうけの初声やたれより先に聞はしめけん

春獣

うちなかめ春にさかりぬ外面を庭梅のちのこゝろ夕月秋の影

花さかぬ山のおくまて訪ゆくも鹿の啼音は月にかすむらん

むつましきをみるそ志らすふ

ふるさとのゆきねのちらひをりくにしてむかしのあはれ見ゆる

暮春浦

うつりゆく花の古寄やするとみてあるは霞にかゝるあまのさりぬる

暮春里

奥山に花のしら雪流れきてうきたる春の玉川の里

春祝

君が代のなかくそ見えん末ひろき御代の千とせの松の千代

海人のかる藻

夏部

首夏水

ちる花にうけし心はきのふにてみなそこあさき瀬の声はすゝしき

新樹雨

夜ふく風あらし旅をうつの音としいくわたりあおする雲のすゝしさ

月にさへしたふこれ菴のあはれしきハすゝしかりくる夕月のかけ

卯花

露やとるのうきて旅寝にたひ路は月とみるまてさけるうの花

夕郭公

うの花はさける垣ねの夕しめり山時鳥一こゑもかな

垣郭公

よそうきを隠つるやとの郭公はきこえありと宿清

古宅郭公

ゆひすてしふるき垣ねの郭公花たちかくれし家の名残鳴らん

牡丹

くさの名の花のみつかに咲しより廿日草とやいつらむ

夜時鳥

さつきやみ一こゑよりもつきなきは夜の志るへは山ほとときす

時鳥一聲

飽かす世につれと哀る一こゑをたのむ山時鳥かたらはん

山時鳥

日ハくれぬやとりは奥山のおくにきく時鳥ハ都へかれて出まし

暁時鳥

おきいてしきのあけ時鳥まつ聲のこのゆふに帰え

時鳥明て隠れぬさしかかりのこす名残ある暁のまの星

里時鳥

たつ里のさとのね覚に鳴く声も志る川の山水もさきに

ひとつさと里ぬのさとハ時鳥思ふ宿つね郭月とも志家

月前時鳥
一こゑハ思ひそめてやかすらん月もさやけく山ほとゝきす

雨後時鳥
雨ちるゝ森の雫をふりちらし山ほとゝきす鳴く夕立の杜

時鳥数声
まちえたるしるしもみえすなれなつ木立志けく鳴のきく山時鳥

山ざとのくさ志賀の山ゝ見えて
鈴風ふらりくとて時鳥なくや新月の志賀けむ山哉

五月祝
あやめふくさ門のまへのよろこひやもえ根さしの鏡なる海

五月みなかすのくもるさとんて
おくえをもえけよくと神山のかさきえし時さる哉

野外螢
くさの名乃おけひのたてさくちてふみしへの窓とまくちるらん

瞿麦露
衣手ふみてれてかくる錦森らまゝ結ならし子れ花の志ら露

月前水鶏
夕月秋おのつふんゆる小板橋下ゆく小水鶏啼なり

月下水鶏
門ことふへつく水鶏をへるみれはうわの空まち夕月のかけ

月に心ありと知りて

新たなる柳にあひくるかりのけなしつゝ紀房月秋の翁

湖邊納涼

すゞみぶねよするさゝ浪浦風に月もゆるゝ波のうへかな

菜摘のうた作

このめつむ少女におちくる一葉よりとちらむのみをさらなり

卯月まうり愛宕山にまうでゝ

法の灯はみちのくの秋よりもしつみゆく深き家の軒端

藤子のうたに

よの中はこゝろありてもわかしと思ひきめてこそ紀伊なり

蓮

つゆあまる月のやどりもあらざりき蓮さけるいけの池の

某師

さゝなみや人の心もなつかしの友の家にもとめてぞ見る

甚山家

岩つゞく志賀の山すゝし紀山りけの葉のかぎりなく侘人やこれ

羇旅

水の上月明かに

さとの子がならす声もと入りて宿ねの床のあかつき旅路

人の世も上中下とうはのせにかくれみをしのばすとしも

こゝろひせしの夫りあらて涼しきハ神のうけひくも秋川風

近秋

日ふそひて出そて紀ふしやうそふらん年代のあそる岩の苔竹

海人能かる藻

秋部

初秋

野風に川そひ柳おとろへて夕の声へ蝉に秋ゆく

初秋月

おと初る桐の一葉は露の上に有ねさめ秋涼き月そやとる

七夕琴

ことの音に合せしきすさひに笹の葉七夕つめにあへやならん

七月七日は夕より

とりをも結ひつけの衣をうち果て早ふ今すゝき何神の家

釣魚

雲はなれまさる今宵の月くさに咲かしつる鈎りの舟のともし

野草花

忘られぬ秋しまのはなにちくさと野草の花のおもかげ野べにうかれん

十六夜の秋かも河にやどりて

秋なりし夜の行あらわれてかけ川の水のよの月秋そあはれなりけり

古寺鐘

いにしへの枕にかへる里とはまちのかん暮の宵の声のたよりとすゝき

尾花

也まさとて人むしかれも枕屋に尾花の袖のなびくかな

霧

志そめて和山峯なかに霧きりのやまさへぞ秋寒き夜を

川霧

浮しづる鈎りのをのふかきに秋その浪宇治の河霧

田霧

小山田のきりは中なかにまで人をも見かにしき雲の山ゆくなり

山家霧

ひとり住むくる人もなき此ねやのきりに立つる秋のやまさと

山路霧

法の路ゆく山下わけ衣そまる露そできりにこえたる峯の松風

鈴虫

こゑよする尾花か末の秋風に乱れてなくやすゞむしの声

月前虫

山さとのくれ竹垣のきり〳〵す月もてらせよ夜な〳〵ぞ鳴

籬中虫

月しろきまがきの荻吹風にうち払はるゝ紀行盛の袖

枯叙虫

秋風は秋をしらせてなき初しものからなるすゞむしの声

秋月

いましばし月よりかへる人もなし雲ゐの秋を思ひやるらん

八月十五夜

あら海のさし出の礒をさして月の光かゝらぬ浪の浦風

ときは紀の月見ん事をまちわびし人の心の今宵やすらん

海上月

よの中の八島の浦の夕汐に寄る波に照弓張の月

海辺月

こゝのとも松ひろき浜秋の夜は月もあかしと浦わの汐ひて

野月

みよし野の山もかくれてなき里もおきまてわくる秋の夜の月

名所月

むさしのゝ尾花か末にかゝるまてをひきすてゝ弓張の月

深夜月

こよひはや夜かけて其のも家し月さし入る浅茅生宿

月のかけきよきる秋すらわあるきして

月のさやけさの雲ゐ落つるんよるなれ秋かゝる志ゝ浮雲

月のあかき秋

山さとにひとりも月をみんゆかはかくしてや結ん人もなき里を

山井のさしてそこらに浅く男あり

山路の野のいさきよく藤の花にて似る名月かけ

こしの人は秋さらんといひて行とも

せきもるころ月あかき秋の夜ひとりそて

月みんとちきりしその夜とおつ人ハおれもまてとつゝもあし

擣衣

から衣うつ声ちかき秋の風に夜のつもるとすゝけてまつ友の夜半

里擣衣

川波のよるくてふころもうつ声をとめて里の秋のひゝき

名所擣衣

よるくるたも袂かわれ唐衣うつらもふけ行林篠のさと

月前擣衣

こゑ人をしらす月さもよ霄あて月をよもしと衣うつらん

隔秋擣衣

唐衣うつ秋とて秋をへだつるやせこがなき身のすさび成らん

菊

志らきくのはなにこゝろをとゞむるよ今ぞもいく世の秋か経ぬらん

九月九日ひとりにて

つむことに露もときくの花ながら寸でにいとゞ身のおいぬらん

紅葉

大方にたつ手向つるぬさなれやあだにちるせも紅葉のいろまさるなり

名所紅葉

一枝もてるをかしけん梅尾の露をもゆるせ秋の山里

紅葉透霧

もみぢちる峯の上にふりかけてわりと紅山路のきりは居たるかな

古戦場紅葉

くさむらし太刀の手しるは秋ふかきもみぢと見するみだれ山

秋夕

たそかれ須磨の松たち居る秋の野でゝ入相のかね

秋山

ちりくるおつる木の葉ふかく中きて栗のいがひとり出てなり

秋田

西はれて秋の山田のまくら其八葉多子のかけを出入なし

秋山里

栗ひろふ道なるむかしのかりにたつけてさけがはせあし秋の山里

折ちる紀萩の花妻志てひ来てなしら鳴かり秋の山さと

秋 海

つ由ふ吹あらしす原秋の風ならしくおもはゆる哉

古今秋海

清く杖をつくしひとり古今のよすきる来しなる秋の世

夜々秋雨

夕つくり入江の松にみなひて鳥もさひしき秋のむら雨

秋 潤

帰るたなは虫のなくねになさる我家のむしすたれつ

暮 秋

身にしみて秋の色をは小塩山もみちの清水てうつしの海

暮秋葉

うつろふ秋の葉のうつりて夜白ひなつの八やつさきさるき杉

大原に住しる法

谷川の水の音すみて宮古の月のあはれを大原の里

秋のころ西行にて

かひなきぬまての虫に鳴て秋あはれ哉こいかりの卯

大仏の別りに住なるころ

秋ふかき小田にかりくふるて秋なけきひしき松の戸ほとの

秋のころすひすみて

月清きくまもねよきくもの名れすゝろさへりおもや更ゆけん
うれすきの外なふ見ゑよきうりて
秋ハ更ゆくへさらとかしよりしやこの光のすゝ虫よ中とやら浪し
秋の末つかた山ちふうありて
山ふかく萩さきりふ紀しらけるても袖のちくまて原紀行
便ゆかきわしる
よそすかうさ夜きくてのうときのつゆも結ひ紀わさかりけりな秋
秋祝
小山田のひこのうけ縄おさえてなかりまきかふ御代の秋の秋

海人のかる藻
冬部
初冬
山さとのうけひのみふあられきえてきのふの秋をみんするかなみちさ
ミつやくれち縫ひたる山の紀のこ字栞よ秋のいろをみんるう那し
初冬霜
打きえてゆふし秋の形見のつゆもなさ霜よ数ゆ浅茅生の宿
初時雨
天の河人めまちのうけよ待てなふハられて是初時雨かふ
時雨

うらかれし浅茅か末はひろかりかけりてふる時雨かな

浦時雨

沖つ島さしほつまて舟にひろひちきり浦にふかしられうき

落葉

山風にその紫もちれて古ちれかきねに落葉をつくねかな

深谷落葉

落積る山のその山を埋みていとゝうき世をとさゝりけり

海辺落葉

梓弓磯山もとち落よりふねの上もてうち紀なるらん

非名月のころ何しし山まそりて

かそちをと川のこなたに吹よせて山は嵐の音そ残れる
もみち葉なくうさあつめたるかな

葉樅こひふかくてしそもみち葉の錦をたゝむ衣ひつきを
わか袂のころうちよまかりて

網代のもみちやりて流しふかれも宮しい宇治の川なみ

嵐

うけふかむ一木のもみちれ千本より何すらてねやよ吹おろしかね

枯野

おもうれてくちはてし果そ哀いつとりねよけふかくしの子

氷

雲ゐにきこし絵の見ゆるへや庵下志きかくるゝ人やされ

湖氷

函根山吹あらしのはけしさを海も氷にみなよりけり
くせよするくゝのうらの様水母ふかれもいく氷にみつけ里

初霜

はつきつる尾花か袖もしほれてかへしたるかきの初霜

錦霜

石の上乃手さへこそされて来霜を錦にうけて坊主談か子らそ

名所霜

千とり鳴かも川堤月更てさえこそ杉和書敷末の初霜

冬の河しほとうさ絵のさえてて
冬かれの大根のくきに霜さえて鈴か出なし菜畑の里

冬月

よもすから吹さらしたる河風にみかけてさゆる冬の夜の月

窓前冬月

霜かさなりへとも聞きさむしろに窓もる月の影まさりける

名所冬月

加茂河の霜よの月をよろもなみ布さへ仮ふと見渡されけり

海邊冬月

沖とおく寄せる月のうけ更て引しほなき絵浦の中くつか絲

千鳥

すゝみつき浪の隔れ舟しるに江をおもうして立千鳥かな

霞

こからしの吹とまけし朱の声をさしもひまなき春霞かな

水上霞

舟かよふ世の隙とちつけて立かくさるさおもかれも年

山家霞

山さとのあやしのすまの賤さうし他のつふてにも立霞かな

旅中霞

かひ人のうつゝ道の稼笠うちぬくえうり浮あられ霧

氷上雪

川風に波と見し氷の消て跡をもたまらぬの淡雪

海辺雪

立かへり難波吉置きはなれん雪おきしる浪路遠山

名所雪

秋篠もうつもれはてゝ雲のうは山松にしつもる雪か花
雪のふりけるな

それ跡るつゝすの木ゝに積雪のきくへすなとりて氷のかけし

寒松

小まちの陰すゆれ雲古すられめも何にぬきて雲ま秋ゝの朝

同題

うけ簾さゝ蚊の月はけふ千葉寺さへ出るまし野辺の夕暮

同　川

大井川岸のあらひにむせぶ也山のおろしの末はおどろき

同　夏

うつし火に流きれて降る秋の夜はあらし抜群にさまよひなる

同　獣

夜の音のゆる人の声や　うそれ降秋を鳴かれたん

身をよせし庵室されて臥き野の雲秋の月に鳴けく

里　緑

時雨のつれ外に時雨六月もよし雨のさとかくこのも

絵のあるみつしたる秋祥子清士のすむところをしけれ共

作者の里に居りして

秋おろしのつゆの果て雲と共におきそ持ちくし　紀の里

宿きぬひとりにして

夜きよの月のこよひの蓬々の三夜六七夜にひとりかもねん

同の秋　猿蓑にゆりて

大井川おせきの流れ青くて冬のさび月の雲はれ

すみもよひて

うつりの蝶もみのちりひらりひて鳴きとしかられるに

初て田舎に住けるとしのくれは
柴の戸にをちとせりくるしきものひとりもの思ふとしのくれ哉

柴菴

去秋とつゆ虫の音きえて一株ゑく萩とふりまさる哉

柴菴月

引のこほりのまもかてに庵くれし此ゆきの末は高ありの月

柴菴雪

ゑんせくと庵ちる萩に見られて袖に雪ちるとしのくれかな

老後柴菴

いくつれて老をそと待し折ひとり身のかゝやけるとしのくれ哉

海人のかる藻

恋部

春恋

つらすてし人のわれからなきかれのひにまとたはりなきかな

夏恋

夏来ぬとなきあひの羅波山ひけうよふみの異としきかや

秋恋

うちとけてかつみ人をとはれのみちをまいはれ秋風ぞ吹

冬恋

こぬ人を待よのむしみはあつさ夜ひきてつけてもねられさりけり

こひをはんせ婦るといふを
いつのまふその字と来なんとけ紙法のことを定此法の

後朝恋

かりそめふかりしや旅寝の仮枕つゆの一種ふむすひ結ひ節く

寄関、

人しれぬあふ坂ハゆるされて立名斗の関守もか那

寄風、

こぬ人をまつの梢ふ月をみてこひをせかくる風のまこと字

寄帆、

なる帆のなりもならぬもしら浪引つくるなん人此ふ紙

寄夜、

まれ志らしせとの秋此かこえハ引かん人をぬるゆへかりける

寄紅葉、

志のゐるより私のかしつもの髪もみちなひとろるは此散るらん

海人のかる藻

雑部

山

いち志るき錦のとはり雄徳山しくもたかきみねの松か枝

川

世の中はちりもあくたもなかれては清きにかへるかもの川浪

峯上雲

香久山やみねの榊になひく雲のかけたるくめの白木綿

松風の聲

つくしとの浦のしらへにかよひきて意松かきたる新の松風

山家

山さとの松杉下志のゝ竹垣て塵のうき世にかゝらぬかな

瀧の音たえまなきにあらしも吹なれて聞くるもの是なかりける

山家月

山さとの柴の折戸をさゝすとも八十よあかしつる秋の夜の月

山家嵐

山のはにはけしく志きく我やとの軒端の松に吹嵐かな

古寺秋

ふるてらの嵐ゆる志らむれふしとさへ入あひの鐘のあはれそそふ

幽居

山みちもすゑハ行くれのなかりし　坂ゆの大根ぬきのつけ菜

秋旅

秋もおしこゝろやすひ人の旅ひする　おかねさや片中山

夕旅

山路わけひのけふへの友ゆく旅ハ青もくれにやまかゝる道し

酒

うさはらしのみらぬすさまじき　二升ハのみし花のくすりなりし

心

うつり行ものも実も心のはやきものさしあらけなし

早

うらむ緒くくりやの櫛にくゝめる蛛のなき出る偽あり今宵

市

売人わかき浪をはさみかちかにこえみてゝゝらんとすらん

古戦場

たゝかひのむかしわれをこそ語ると志ゆくかやまふ紅葉の名にはなからう

幽霊

わさくしきすかたの影の浅にきくぬ　わか火や秋くまわらん

すひよあらて

くもるとは山眉に引そひてみへくなりけり　旅人の骨

天保山にてひねりして

海士の居りにまかれる蛍火のかけかすかにて旅をおもひしき

槇田のほとりにて

志かなくしてやくら蚊のしき世とふる思ひの火をたかましゝ

宇治橋乃ほとりにて

志らしぬ者をうけておそれくようちかしの夕月ゆかしき

世山の狭やすひ人多くあつまりて

紋くひする里り

大御代をいはひていのりてけふあつけふ世山の子すら紋しき紋

おもしとゝへつりのりて難波よりて

名ることき

川ふねのさほさしくまつ見渡してほとりちかくひとり方の内に

うひ人名無不いとく

これちかきにわたりけて足引の山しなる松ちるなひ人

山しなれ袖にくへして

我たうりや何世し人をまつのみの水ゝたの岸波の影

宇治にすみかりてよめるうたのなかに

うつりよきうちの新茶をのみて初しく人の声を波てとりならし

波折て世を外にれつ世山吹の花の香ふかきうちの川水

海人月をよくふ

さほ棹もなけ世のあかりつゝ月をかたらふ海士のいさり火

松のもとにいほりむすびて
いまはとていでゝいんきをまつけにきこしうき世のなかにすみして
山かけにいほりして
かきつりの岸はいかりも結ひし網ひきれ雨つゆいとゞしくぞけせる
佐々木梶原がさきをあらそひて宇治川を渡る所
うきを渡ときゝておひてわたし武士の名をあらはしけるうち川に
軍ふうちのる人の鞍かし
おさまれる御代ではふきものゝあとで例ちあしくかへりかせ
世の中さまのしかりなりける
夢は世とゆめひすつれをもうらみをおもひそれし松の緑の枝すれ

ふしみより河舟にて人あまたのれ
たりと人はのぼるときこえて
皆すこし神楽姫君のへにさうにのこは誰が子ならん
いふきすれ様子あれのかくとうちさされてきゝやさしけん
山かしと云ふ鳥をたづねて
こゝは川の名をかりおのが名は山かつにあそびくる
遊女の声かり
あふせの名をとりかしまのもとよりかまつる御代とハ契りけるを
出口の柳は垂に
なつかしき柳の眉はたらでなびくけふやさきのみどりくれ

砂拂とうり乃うたに

まつ樽にひさゆひつけてとうりなき富士すれぬ荏とや いそかん

狸のさらけかうとむるうたに

古くみさきけむとむるやみのよのあけつれしのすさひ寐らん

狐乃化るうたに

人まつる清水の原れ名まされおのか尾花や花とみえすも哉

盗人の入る時

山猫かかきあつめてるかしのそときての玉とや夜来つらん

大津画のふち娘のうたに

いにしへの手ふりゆかしき絵写画の世にまかり行るふちかなしき笠

槍持し奴のうたに

ふり立しまつし学一寸まてまつりにあふさらん世をき

槍持しく泉のほつみのうちは

中くにむすめのなつすやいくらん年かおゆのるし上をして

老女のかくらんまうしてうた

花まてんしなるにむらしれかる見るかけまつし紀雪の白ら髪

大原女のうたに

おそくへしまる柴のまからとるくろ大原山のきなれたるのも歌

くうしひきしらふくしを

いかそうり狩まひあるのえまおつんたのそこの谷たちまれ下いも

つゝみて花のめを追ひて
ゑすさひはりなきものを持出てうる年の市にたちまさりけり
おもの年を
んつゑうち渡りけるかうけたるおもは風を絶ひさしてね
名かきつて身もやしぬまつ山の蓮のおる稲をみぞ浮かる

述懐

なけ結ぶ葉のつゆはきへやてあやゝせとももつるかな
山の井もれそことちゝ結き竟りをうちかくる人すむ人あひのかね
うき世もせんきゝ心もやゝ浪おゝへて年勝てかく来よるかな
よの中ハたゝうつ藤の若かくを岩ぬ若路すまゝふらるなさ

老後述懐

行年もまたなきてとしをかるゝのもうら花しみそらのあかりなる

寄瓢述懐

ありくて六十あまりのおなかなきみかつ浦くれ似さなるかな

寄鐘述懐

暮の鐘に驚き香るこよなりける人をもしかつの相の糸
思ふきゝ結ぶ絶かる
うき世の黒谷ぶかすきまでも任せぬ身のきてゝるゝこゝ里
歎しき
よわりしのおもふ山まへてはし学の花さく身の由来も思ひやと

年のころみまかりける人をおもひ出て

野寺の山かけの月よふかくへつらん尾花秋さきゝの枝折て

七十七の文字

あさくふかみとりのさかひて栄る千代か世を位の名に松そ久しき

寄松祝

千代とりも君かきとひのたきてはね松やあかくもへんとすらん

世のかりを金添てかひて行末の千代をあらする世々の松風

契松千歳

行末のさかへしよりひを二葉まて千とせをまつやひさしかるらん

寄竹祝

君の君たちて千代まて寿をまつ末の代かゝる例なきまてさし

千代これるすゑのくれ竹よそなひて行おのしの数やかそへん

寄菊祝

たかきをうけて仕たも千代や旅んの家は菊すときく林下 寄

寄鶴祝

ひなつるの行末をかきこし御代八御代をまてとせとうつふえるり

寄亀祝

萬代とよひ深きしつくんその亀は尾の山乃しるき

亀あまたかけるうくこく

むかしめの ひとむくの万代をとりつかて君をうそ居ん

うめのうたちしる集合の家に
万代のあしふり作し名あゐ代ハまかうけ人に家代乃始らん

海人のかる藻

大御のかとりに基をむすひたる折

新春よつのとしうら月ハかりけをむすふところひて世の
たくつちはとりうきはこなひなふを見れの人すねせん
とていとりうらあに松かひちてねんすよ身のをぬくる
あうのきのふとりいれてまつかう松かまて東山なる雄
海乃けしきをふみてうかくかうふかりのしぬきてきぬらる
これの帰りとそていきらあまりむらしかくつちゆうこの
あらひきいみしうりしわとけをゆけすひぬきしと
なむ思んくお玉あんのここそみそうりたるそのうたへり

大き やのなるかねをとりて いで傳へいふかりゆく傳よ
いそぎしみちにふみ田原の志ら河のみんなれたるんちか
もとの土地山に出てまして去年御新堂とそいふあ
給ふとおくひろくしてさる林のこなたちまさむをと
まかのよしこらなるもかなてさら紀して任ずる事し紀
いそしうおもれはみすてヽ紀ところのさ度あり
暁されわたけのおもてはかれふりかゝとしていさつ
かふかしたまる

このおろをとふ人あとに出て山にかきしるあしくて
あそいかなし、哀愁ふさしそふ慶山の事しるいと

すゝしくかとふまにも志るし　峰の松を
のちの世をうけよくときさゆあり　わきの峯あおく
おもひ絶すいあらの律師をひえの峰すとふれ出なひ
たふとの行ありてすゝてかひぬれとさぬかとをいほく
人然まれまてひろらのあみおかけ唯ひとりおもの
しかすおとにおるは行うきかしてちいて多さりかへり
てきりやのうすをつきなこの日法然奉みぬか傳ひとり
いてきてりおやしうりいとうあらんとこらふおれとらきてかく
るふをきとさろうは行あきとさゆりのゝ傳しいおけて
まのあとひいしことをむかし　おきさふかりくたてり人にし

かりしをおそき事とのこときゝたりしか浄土にこそ
と思ふもえなくてこのたひたにこそ弥陀を頼まれ
うちれ母ありしかはかなくなりてころみなとらし
つきとだけたるものもおもへハ子ハさてなきたゆよめ
すらうりけりやそのくらつゝうとらしろ給くつくて
男をすてゝ今はしまかなり子ハさりけるもたからハり
うちらか清ら新ハひとりこそりしてふしとるふいとやし
言けあるひとりのかみた娘くなくて時ちしかりいろく縁
あふらか人ろきこゝろのむさきてしらうり子の光あるかゆき
りのをしてほとう木のつ思ふとゝきてよるかきりとて

よくわらのそてうれまりそつかりのかけなるのなきも久しう
外にありてよかなんくくり待ちをおもひまたらみハうらこ
一世の中はきそといふそてかとけおもふ人をむすむよ
けきー生ちやれかり中にも人至心信楽常念我名
なときすことも待ちハ時たちうきとなし親のてらしけなき
弟子をふかくおもりひとりたへすがらてのまゝしのかへり
そえそくよくくしとひゐきうめたへよかといひともてこら
ふかくするをときくく親もおもけぬへうきこゝろもとうれ
もしうりうりゆきものとなひしもつてうれなくり
去の案うまのりたり鏡りしと思ひそうふてのこそてりの

かなしふ住なる法もとをさとこいてきこえて一日まし
のたよりあつまりてきこしりし法をきゝえすもち
みりしうもおきなさりたれたさしおきえてかくぬと
いふりことゝも松ちの如
世のつねはまんの恩なしてしもちいう法のおとさへ
法のこゝろあり、いとつまとくこゝろきさてあるれとり
律師のくすりたひぬきりしま 六条の御おちるはら
ろうより花んのされおもしたるをこのほとありてこ
いとあつしうちやとこうしせたうふとて法もしくてうへ
あひてまとひいそふせ法しと給うし こたうしぬさけし

あまつとくさせたひてうつてひあさも いとさうらくこゝろを
つくしなふつきしも三寺法をしあなふこそのしおよそり
次加持するり給ふに任ぬとてうらぬ法なくいはせ
かなくとのうせるを如次に世うやおちちしまりしきさん
りふたふあつしうろをなりまうけりたふうきて人くわ
しもそしふうけつを訪んてきて祥紀まうえ様をくしうはり
まうしんとねんじきこえんたひしらともついふみ六月
たるの秋子とこうりうやあたらんいとたかなくみうせたらひ
しとそて 御母宮乃 ねちしま法ときこえつるをいうふおも
わしなりきたふしんとおすひやりくてそまつるおもみえるう

谷下りしてある下露乃霧もきく人の心地さへうち拭て
まうやすくてものうちにはゆきなれけむよりのやみかり
くれにまよひはふしてそのよをあかしつく行きの
住まひ清くもてなせるかなにハまさ人かけの末を詠ふるも
きりしと奉らぬハなかりなるやうにとや山の庵をまうけて
ねむりしのびやかなるをそのあたりのふみなどもせるゆかしき
おもひのまうさねハとりてまさしく大やけへきこえ上奉ると
さてもわらんべなかりしひとなきハ十二年の秋ころのうしろれ
みせし志のみて我はしのまゝにふかいとあへきころかな
なりつかはしきを九ハ行年のほどへてもまうさるべからむ

こゝちしてあせをのごひておもひよりのかたへさしゆけるに
しばしやすらふほどおもふやうに木の下やどのあはれなるも
さびしうてふたんをてすりしむるなるらんかしとおもひなしや松の
かうけかのもとにくちはてし秋のけしきはしいはあはれ
かんなそし志のびやかなるこゝろしてぞおもひしやすらひを
すのこしふれうごきするにもつくへの袖も志ぼるばかり
なんとなきいとゞ人しれず志てくらくまたふしたまひす
なにかゆの志づきにこゝけふるをおきそへつゝともなく
くるゝよりはいやまされるもあはれなりけんり　七日
すぎければひまもなくまことに日のかきハすみぬるにてさいさき

たまひてりのゑもなく衣きぬて雲脚なかくおもてなる
ふる月やゝのこゝろやかなしけくすゞしきよのいとあはれ
かりさらあはれ
志らつ由のむれ杉よりは彩むら雨けのかせる
ふしとふけくふすとよりうんわくれハしろき御所とは
なつうけ此花の香あをざらけまりてくへいけともすなう
てまふ律かもとぐらふ名かりしまりなふ行くれを
とりわつせんするあをれハつき由ぬりのうさゝのとハして
うらめつ神よなりゆくやまくり志を生れ小萩かさ秋の
庵虫嗅らくすゞ虫のねをいとき面くま鳴かん木を

月のあふきさ杉なとハいとくあそきふみすしろく作え
ちうしこたつまえんくりて
清由ふかき花のみそくくふりまう
わとけの杉し名のまゆくりて
古寺みこけちハあともなそのきみ聲
よふくしもり月をらく空
古かはしおちてこけむすくれむしき
らゝろなつくしもすみうり月か部
ふうきき世を背ひねさめれ耳清かふ
秋のこゝろきく御きれ山ての郷

秋の秋も今宵いつくしかきて
へたてなき心をしる 初かふ
つゆしもにやどれる月のかげ 秋
かぞふる数ある秋ふけ行り
八月を秋しむすひふのこゝろ空
うけをやらし 露れしか 玉
まふくの月になかれて心なりけを
うらなくつりしきてこちこゝろ まさる
あはれとおもふころもなくて月のまた
見ゆるかはまでなるつる 可那

八月十五夜のかたつちの秋を由をおもひ中のまゝにて
気なくて御覧しまして秋十五夜
あはれしらけを月やましき影の
ましき秋の月にまつしまの秋の
名にしおひきの都の院 陸
身にしあへし 詠みて 名のこる
秋にそへしとすかしにおもひ 柳のまた
かくなりけて

今宵秋より 秋も ひとつれとつゆのかゝり
見るなきのかゝる 我らかな 可那

花紅葉にあそひて見る者乃涙は物にまかせて見ゆ
まことに深く心に思ふ事のあはれなるにまかせて萬の物乃
移りかはる事をつきせぬ人の心の種とならしめふ
もとよりわりなく言の葉を聞しかハみのかの手にまかせき
何にもなき道をまねふは世の古き事にして見てしるへき女
さらひの深き手弱めにして雄々しき心をもまし
何にか心を尽くしてまつなくて
書學ひに志なふる大人蓮月尼ハ昔よりかくて

海人乃かる藻 序

富岡氏藏

大方乃形のさだかなき好ものなりし我をなるこの時に
めでしまふにかなることの葉にしみ風や雅乃
花にあそびしは男はまきせし折ふし秋、春は冬
けるを事なりけり御して古今にしこ東へなる女の道
をふやそれくむちの文神乃代より女子で此とらは
生ちいとく錦とくふきはもてよるす我なくの牡丹
来りて世のて学ゆ御母乃命八よのこつくにハ一方々
つまなるもひは御子經ゆ女のあのる御旦一くぬく

さ給ひしめでし此ふ神遊出るゝ儒佛國にもる
始さるは付りすゞ外國へとみをへる成思風八
上古我大道として天みおけて王へるあかとこの秀字
これをも見きまでたのしうしつてし此四書
話書と海土の竹藻なくれおすもすなみをこう我
忠林ぬかさる我のてとわりぞへく經るゝ
をしく井くこ神をの玉藻乃葉ゆなたの言の葉
をみなのあるものつひる身くるもあし漢字定

み海にあひきするあまのこらのあさなゆふなにある
こゝろよき旅人はひとつふたつあけおのかしく
あるは中出て見とて置きしをあらわれてはなそ
めるも万葉のおもむきしの花のひとつのたはこを
けりのぬるむしかなとこそつゐにうたゝもあつかひ
あるは翁を知る世の心のうちにぬることろの
浮世になる〳〵にも遊ひて蓮もいたしや翁のさる月
かゝる家にあらはそこゆるむそちらも多

身にのいさる〳〵ひさしく見なれし今ハこの佐川氏か
いゑつまに所蔵せるのいたく出るへるうひ
草をひらく世にのもろかあまりにまれ
秋くれるものとあ藤たちうしの紙
なうこえのひあらはしてまた書の綾の
てしいなく言なのくさ紙

さゝし井　玉緒

この君ハ吾すれ日のかまてもうしう
むつひあはし ぬみまじれ 捨ぞ侍りてしも
ましこの里にかゝれ もみあはしぬ
されまりゝ ぬ出きれハいと嬌りく あひ
うけふ中らせかゝれハなとゝこゝまで
近頃菩樹のみやこに ぬ出にたまわく
君まみの女に 西か藤の唐よらむしむ
まゐりとうけきみのよの ちりし とまし

らひさしく納言殿乃若君かれハ
つまつりたまへるこのとの心はえあり
よろしうつりのはる時に御かみよ方より
なりめりく松ひみはもろきふの道にも
なることかいみえして手紙ハこまし
とひてまつハ返事堀川
そののちとりてかのめも御まへに侍ぬよりつく
かくれぬひかれハせむまつてまいらせ

さらさきてはらせりかしもかまへことの
とものおもふきにはなかなる人もさとう
なうしさこれにかまふたつとくまたられ
松原大臣東宮のはしまめのうちきてまし
みやはうこともの中よりかく心みくぬさいハ
てくさる海をなをしめむひけるハ
みよれの心すなもまくまいらぬハみき
みなはくしみにもむなけるおほくれを

はるけかりあるはやをおもひぬまし
おいらわかくうかりさいたらつゆのさかなかれは
ちよもかはらくことしあやうけゆかり
きまことをかしぬすまれいちよはかいらて
うくまくい

ちつ女

明治元戊辰歳仲冬 官許
同二年己巳歳初夏 刻成

花洛
書林
寺町通二條 木村[illegible]兵衛
三條柳馬場 辻本仁兵衛